

本稿で用いる調査は首都圏および地方圏が調査対象に含まれ、加えて、例えば四大進学率の観点から見てより幅広い高校に対して調査を実施しており、高校生のアルバイト経験に関してより一般的な情報を得ることができる。また先行研究がクロス表による事実確認を重視していたのに対し、本稿は計量的な手法を用いて、複数の要因を制御した上で、アルバイト経験と正社員就業との間に関係があるか否かを考察している。

本稿の結論を先取りすれば、高校3年の4-7月時点にアルバイト経験があることは、その後の正社員就業に負の影響を与えている。ただし性別でサンプルを分割すると、女子生徒ではアルバイト経験が正社員就業に負の影響を与えるのに対し、男子生徒ではその影響が有意でなく、アルバイト経験と正社員就業の関係が確認できなくなる。

本稿の構成は以下の通りである。2節でデータの概要と分析に用いるデータセットについて説明する。3節では地域や高校の種別、四大進学率などの変数とアルバイトとの関係について考察する。4節でアルバイト経験と正社員就業との関係について検証する。5節で結論を述べる。

## 2. データの概要とデータセット

以下の分析では、東京大学社会科学研究所の「高校生の生活と進路に関する調査」研究会が2004年1月に実施した「高校生の生活と進路に関するアンケート」（以下、生徒調査と記す）および「高校生の進路指導に関するアンケート」（同、高校調査）の個票データを用いる。これらの調査は高校生の進路決定までの行動や学生生活の内容、高校の進路指導の実態に関する多くの調査項目を含んでいる。

生徒調査の調査対象は秋田、宮城、石川、神奈川の4県の高校に通学する高校3年生である。調査対象県は、若年無業率の高低と進学率の高低で都道府県を4つに分類し、各分類から1県を抽出している。調査方法は各高校に調査票を郵送し、生徒の記入後、高校ごとに郵送で回収している。高校調査は上述の各高校の進路指導担当教員に記入してもらい、郵送で回収している。

分析に用いるデータセットは、上記の2つのアンケートデータをマッチさせたものである。例えば四大への進学率に関する情報は高校調査に含まれており、これを生徒調査に統合させて利用する。分析に用いる項目の大半は生徒調査に含まれており、分析には主にこれを使用する。生徒調査の標本数は7563人、高校調査の標本数は78校である。

## 3. 高校生の属性とアルバイトとの関係

本節では高校生の進路とアルバイトの関係を検証する前に、基本的な情報として、調査対象の高校生の属性とアルバイトとの関係を、クロス表から確認する。その後、どのような属性を有する高校生がアルバイトを経験しやすいのか、あるいはより長くアルバイトするのかについて、プロビット・モデルとトービット・モデルを用いて検証する。

表1 高校生の属性とアルバイト経験の関係

性別		標本数	アルバイト経験	
			なし	あり
性別	男子	3600	80.64	19.36
	女子	3808	75.50	24.50
	合計	7408	78.00	22.00
学科	普通科	5204	81.36	18.64
	商業科	626	65.02	34.98
	工業科	768	71.61	28.39
	総合学科	594	69.02	30.98
	その他	228	82.46	17.54
	合計	7420	78.02	21.98
四大進学率	15.5%未満	1860	63.12	36.88
	40%未満	1796	74.89	25.11
	40%以上	2080	90.14	9.86
	合計	5736	76.60	23.40
都道府県	秋田県	1900	85.68	14.32
	宮城県	1775	76.85	23.15
	石川県	2702	75.87	24.13
	神奈川県	1047	71.54	28.46
	合計	7424	78.00	22.00

注) 表中の単位は、標本数が人、アルバイト経験

が%

表2 高校生の属性とアルバイト経験の関係

——男女別				
		標本数	アルバイト経験	
			なし	あり
男子×学科	普通科	2289	84.10	15.90
	商業科	228	74.56	25.44
	工業科	661	73.22	26.78
	総合学科	304	70.39	29.61
	その他	116	93.10	6.90
	合計	3598	80.63	19.37
女子×学科	普通科	2904	79.20	20.80
	商業科	398	59.55	40.45
	工業科	106	61.32	38.68
	総合学科	289	67.47	32.53
	その他	110	70.91	29.09
	合計	3807	75.52	24.48
男子×四大進学率	15.5%未満	857	68.38	31.62
	40%未満	866	78.41	21.59
	40%以上	900	92.33	7.67
	合計	2623	79.91	20.09
女子×四大進学率	15.5%未満	1000	58.60	41.40
	40%未満	926	71.49	28.51
	40%以上	1178	88.54	11.46
	合計	3104	73.81	26.19
男子×都道府県	秋田県	983	85.55	14.45
	宮城県	634	73.82	26.18
	石川県	1420	79.44	20.56
	神奈川県	563	82.77	17.23
	合計	3600	80.64	19.36
	女子×都道府県	秋田県	912	85.75
宮城県		1139	78.58	21.42
石川県		1277	71.97	28.03
神奈川県		480	58.13	41.88
合計		3808	75.50	24.50

注) 表中の単位は、標本数が人、アルバイト経験

が%

### 3.1 高校生の属性とアルバイトとの関係

本段では性別や学科、四大進学率など、調査対象となる高校生の属性とアルバイトとの関係について、クロス表から確認する。

表1は高校生の属性とアルバイト経験の有無との関係を示したものである。男子生徒も女子生徒も、高校3年の4-7月には多くの生徒がアルバイトしておらず、アルバイトをしている者は2割程度である。男子生徒よりも女子生徒の方が、アルバイトしている者の割合がやや高い。

学科別に見ると、アルバイトしている者の割合が高いのは商業科に属する生徒であり、高校3年4-7月時点でも3分の1程度がアルバイトをしている。他方、普通科ではアルバイトしている者は2割程度である。

所属する高校の四大進学率との関係では、進学率が高い高校ほど、アルバイトしている

表3 高校生の属性とアルバイト時間の関係（アルバイトをしている者のみ）

	標本数	アルバイト時間				平均
		1-10	11-20	21-30	30+	
性別						
男子	697	31.56	37.45	21.38	9.61	16.69
女子	933	33.65	43.62	16.61	6.11	14.95
合計	1630	32.76	40.98	18.65	7.61	15.69
学科						
普通科	970	33.20	41.96	18.04	6.80	15.34
商業科	219	32.88	35.62	21.46	10.05	16.17
工業科	218	27.98	43.58	18.81	9.63	17.06
総合学科	184	30.98	42.39	20.65	5.98	15.88
その他	40	55.00	27.50	7.50	10.00	13.25
合計	1631	32.74	41.02	18.64	7.60	15.69
四大進学率						
15.5%未満	686	31.49	41.40	19.97	7.14	15.92
40%未満	451	31.04	45.01	18.18	5.76	15.27
40%以上	205	33.66	44.88	16.10	5.37	15.02
合計	1342	31.67	43.14	18.78	6.41	15.57
都道府県						
秋田県	272	33.46	34.56	19.85	12.13	17.04
宮城県	411	37.71	37.47	19.46	5.35	14.84
石川県	652	34.82	42.64	15.18	7.36	14.92
神奈川県	298	20.81	48.32	23.83	7.05	17.30
合計	1633	32.76	41.03	18.62	7.59	15.69

注) 表中の単位は、標本数が人、アルバイト時間が時間、平均が時間

生徒の割合が減少している。

地域との関係を見ると、進学率、若年無業率共に高い神奈川県でアルバイトしている生徒割合が高く、進学率、無業率共に低い秋田県でアルバイトしている生徒割合が低い。

表2は表1の結果を男女別に確認したものである。例えば表1では商業科の生徒でアルバイトしている者の割合が高かったが、それは主に商業科の女子生徒で顕著であることがわかる。他方、商業科の男子生徒は、工業科や総合学科の男子生徒と比較してもアルバイトしている者の割合が特別高いわけではない。どの学科においても、女子生徒の方が男子生徒に比べてアルバイトしている者の割合が高くなっている。

四大進学率との関係を見ても、進学率の高低にかかわらず、女子生徒の方が男子生徒に比べてアルバイトしている者の割合が高い。

地域との関係では、男女別に見ると神奈川県の男子生徒はアルバイトしている者の割合が特に高いわけではないことがわかる。男子生徒の中では進学率が低く若年無業率が高い宮城県においてアルバイトする者の割合が高いことがわかる。表1、表2をまとめて見ると、男子生徒よりも女子生徒の方が、普通科よりも商業科の方が、四大進学率が低い高校の方が、若年無業率が高い地域の方が、アルバイトをしている者の割合が高いことがわかる。

表3は、アルバイトしている者に限定して、属性とアルバイト時間の長短の関係を見たものである。表1などでは女子生徒の方がアルバイトしている者の割合が高かったが、アルバイトしている者に限定して時間数をみると、長時間アルバイトしているのはむしろ男

表4 高校生の属性とアルバイト時間の関係——男女別（アルバイトをしている者のみ）

	標本数	アルバイト時間				平均
		1-10	11-20	21-30	30+	
<b>男子×学科</b>						
普通科	364	32.14	38.74	20.05	9.07	16.32
商業科	58	44.83	18.97	22.41	13.79	16.10
工業科	177	27.12	41.81	20.90	10.17	17.49
総合学科	90	26.67	35.56	28.89	8.89	17.83
その他	8	62.50	37.50	0.00	0.00	7.38
合計	697	31.56	37.45	21.38	9.61	16.69
<b>女子×学科</b>						
普通科	604	33.77	43.87	16.89	5.46	14.76
商業科	161	28.57	41.61	21.12	8.70	16.20
工業科	41	31.71	51.22	9.76	7.32	15.20
総合学科	94	35.11	48.94	12.77	3.19	14.01
その他	32	53.13	25.00	9.38	12.50	14.72
合計	932	33.58	43.67	16.63	6.12	14.95
<b>男子×四大進学率</b>						
15.5%未満	271	32.10	35.79	23.25	8.86	16.73
40%未満	187	25.13	46.52	21.39	6.95	16.61
40%以上	69	36.23	37.68	18.84	7.25	15.97
合計	527	30.17	39.85	22.01	7.97	16.59
<b>女子×四大進学率</b>						
15.5%未満	414	31.16	44.93	17.87	6.04	15.35
40%未満	264	35.23	43.94	15.91	4.92	14.33
40%以上	135	32.59	48.15	14.81	4.44	14.52
合計	813	32.72	45.14	16.73	5.41	14.90
<b>男子×都道府県</b>						
秋田県	142	30.28	37.32	21.13	11.27	17.54
宮城県	166	37.35	27.11	27.71	7.83	16.31
石川県	292	33.56	39.73	17.12	9.59	15.89
神奈川県	97	17.53	48.45	23.71	10.31	18.52
合計	697	31.56	37.45	21.38	9.61	16.69
<b>女子×都道府県</b>						
秋田県	130	36.92	31.54	18.46	13.08	16.50
宮城県	244	37.70	44.67	13.93	3.69	13.88
石川県	358	36.03	44.69	13.69	5.59	14.12
神奈川県	201	22.39	48.26	23.88	5.47	16.71
合計	933	33.65	43.62	16.61	6.11	14.95

注) 表中の単位は、標本数が人、アルバイト時間が時間、平均が時間

子生徒であることがわかる。学科別に見ても、商業科の生徒はアルバイトする者の割合は高いが、そのアルバイト時間は他の学科と大差がない。四大進学率との関係では、アルバイトしている者に限れば、進学率が高いほどアルバイト時間が短くなる傾向があるが、その差は小さい。地域との関係はやや特徴のある数字を示しており、アルバイトしている者の割合が低い秋田県と高い神奈川県で、アルバイト時間が長くなる傾向が見られる。

表4は表3の結果を男女別に確認したものである。表3では商業科の生徒のアルバイト時間は他の学科と比べて特に長くなかったが、性別で区分すると、女子生徒の間では商業科のアルバイト時間が他の学科と比較して長い傾向が見られる。他方、男子生徒の間でアルバイト時間が長いのは工業科や総合学科といった学科であり、商業科の生徒では10時間以下の短時間アルバイトをする者の割合が高くなっている。

四大進学率との関係では、男子生徒では進学率が高いほどアルバイト時間が短くなる傾向があるが、女子生徒では進学率が低いグループのみがアルバイト時間が長く、それ以外

では長短の差が見られない。地域との関係では男女とも秋田県、神奈川県のアパート時間が長くなっている。表1から表4をまとめて見ると、アルバイト経験の高いグループでアルバイト時間も長いとは必ずしもいえない。アルバイトしている者に限定すれば、進学率や学科によるアルバイト時間の長短差は比較的小さいといえる。

### 3.2 プロビット・モデル、トービット・モデルの推定結果

本段では、前段のクロス表の結果をふまえて、アルバイト経験の有無およびアルバイト時間の長さや高校生の属性との関係を、計量分析から明らかにする。計量分析の手法としては、アルバイト経験の有無に関してはプロビット・モデルを、アルバイト時間の長短に関してはトービット・モデルを用いる。

プロビット・モデルの被説明変数は、高校3年生の4-7月にアルバイトをした場合に1、しなかった場合に0をとる二値変数である。トービット・モデルの説明変数は上記期間におけるアルバイト時間の長さで、アルバイトをしなかった者は0時間とし、アルバイトした者は調査項目にある階級の中央値の時間を用いる。このように被説明変数が負の値を取れず、かつゼロの値が出現するようなデータの場合、トービット・モデルのうち途中打ち切り回帰モデルを選択し、推定する<sup>(1)</sup>。

説明変数には、下記のような変数を用いる。以下、順に作成方法と予想される符号について述べる。

性別：女性が1をとるダミー。

四大進学率：高校の卒業生のうち、四大に進学する者の割合。上級の学校に進学する者が多い高校ほど、受験のための勉強時間を確保していると考えられるので、アルバイトの有無や時間には負の影響を与えると予想される。

学科ダミー：所属学科がそれぞれ商業科、工業科、総合学科、その他の学科の場合に1をとるダミー。基準グループは普通科である。その他の学科の中には、農業科、家庭科、看護科などが含まれる。

第三次産業比率：回答者が通学する地域の15-19歳就業者に占める、第三次産業就業者の割合。2000年の国勢調査から男女別に計算した。高校生が従事するアルバイトは主にサービス業関連の職種と考えられるので、県内に第三次産業での就業機会が多い方がアルバイトしやすいと予想される。

有効求人倍率：2003年4月時点における、各県の15-19歳常用有効求人倍率。常用の定義の中には新規学卒者は含まれず、パートタイムを含む。職業安定業務月報から作成した。各県の若年層における就業機会の多寡の代理変数であり、有効求人倍率が高いほど、アルバイトしやすいと考えられる。

なお表1などで用いた県ダミーは、第三次産業比率や有効求人倍率と高い相関を示すため、推定から除外した。推定に使用する変数の基本統計量は、表5に示した。

表5 基本統計量

	標本数	平均	標準偏差	最小値	最大値
アルバイト経験の有無	7424	0.220	0.414	0	1
アルバイト時間	7424	3.451	7.947	0	43
正社員内定の有無	1904	0.742	0.438	0	1
性別ダミー	7544	0.512	0.500	0	1
四大進学率	5832	0.362	0.283	0	1
商業科ダミー	7558	0.084	0.277	0	1
工業科ダミー	7558	0.105	0.306	0	1
総合学科ダミー	7558	0.081	0.272	0	1
その他の学科ダミー	7558	0.030	0.172	0	1
成績下位ダミー	7563	0.332	0.471	0	1
成績上位ダミー	7563	0.333	0.471	0	1
一貫して就職指向ダミー	7449	0.100	0.300	0	1
就職活動1	7563	1.060	1.397	0	4
就職活動2	7563	0.532	0.982	0	3
就職活動3	7563	0.308	0.555	0	2
第三次産業比率	7544	0.671	0.127	0.496	0.854
有効求人倍率	7563	1.906	0.767	0.830	2.960

表6 高校生の属性とアルバイト経験の関係 (プロビット・モデル)

	男女計	男子	女子
	限界効果	限界効果	限界効果
性別ダミー	-0.121 ***		
四大進学率	-0.594 ***	-0.482 ***	-0.672 ***
商業科ダミー	0.027	-0.069	0.036
工業科ダミー	0.033 *	0.024	0.037
総合学科ダミー	-0.014	-0.001	-0.018
その他の学科ダミー	-0.042	-0.081	-0.019
第三次産業比率	0.786 ***	0.537 ***	1.584 **
有効求人倍率	0.093 ***	0.060 ***	0.095 ***
標本数	5724	2621	3103
対数尤度	-2678.84	-1185.83	-1481.78
Prob > chi2	0.000	0.000	0.000
擬似決定係数	0.140	0.099	0.169

注) \*\*\*, \*\*, \*はそれぞれ1%、5%、10%水準で有意なことを示す。

表7 高校生の属性とアルバイト時間の関係 (トービット・モデル)

	男女計	男子	女子
	係数	係数	係数
性別ダミー	-12.191 ***		
四大進学率	-45.178 ***	-45.733 ***	-43.223 ***
商業科ダミー	1.488	-8.031	1.825
工業科ダミー	3.045 **	2.833	2.473
総合学科ダミー	-0.878	0.424	-1.353
その他の学科ダミー	-4.206	-13.062 **	-1.153
第三次産業比率	68.352 ***	59.220 ***	113.145 ***
有効求人倍率	6.511 ***	5.305 ***	5.296 ***
定数項	-54.855 ***	-50.286 ***	-98.808 ***
標本数	5724	2621	3103
対数尤度	-7586.56	-3150.56	-4409.78
Prob > chi2	0.000	0.000	0.000
擬似決定係数	0.054	0.040	0.065

注) \*\*\*, \*\*, \*はそれぞれ1%、5%、10%水準で有意なことを示す。

表6にはプロビット・モデルから計算された限界効果が、表7にはトービット・モデルの係数がそれぞれ示されている。表6、7共に男女計の推定結果と、男子生徒のみ、女子生徒のみの推定結果を記載している。

プロビット・モデルの結果を見ると、性別ダミー、四大進学率、第三次産業比率、有効求人倍率などが有意となっている。そのほとんどが予想通りの符号となっているが、性別ダミーだけはクロス表の結果と異なり、女子の方が男子に比べて12.1%アルバイトする確率が低いという結果が出ている。四大進学率や学科など他の要因を制御すると、実は女子生徒の方がアルバイトしにくいことがわかる。

性別でサンプルを分割した結果を見ると、四大進学率の効果は女子生徒の方が高く、進学率が10%高いとアルバイト経験確率が6.72%低下する。また第三次産業比率や有効求人倍率の効果も女子生徒の方が高く、第三次産業比率が10%高いと経験確率が15.84%上昇し、有効求人倍率が1高いと経験確率が9.5%上昇する。この結果からは、通学している高校の環境や通学地の労働市場の状況など、外的環境の変化に女子生徒の方が影響されやすいことがわかる。

表7のトービット・モデルの結果は、有意な変数や符号の方向がプロビット・モデルの結果と類似している。四大進学率や学科などの要因を制御すると、女子生徒は男子生徒に比べ12.2時間アルバイト時間が短い。性別でサンプルを分割した結果を見ると、男女間で差が大きいのは第三次産業比率の効果で、比率が10%高いと、男子生徒ではアルバイト時間が5.9時間伸びるのに対し、女子生徒では11.3時間も増加することがわかる。

#### 4. アルバイト経験と正社員就業との関係

前節ではどのような属性を持つ高校生がアルバイトに従事しているのかを、クロス表と計量分析から明らかにした。本節では希望している者が正社員に就業することに対するアルバイト経験の有無の効果を検証する。以下では、アルバイト経験と正社員内定との関係をクロス表で簡単に確認した後に、計量分析からその効果を明らかにする。

表8は、高校3年4-7月時点でのアルバイト経験の有無と、就職を希望した生徒のうち正社員の内定が出たものと出ていない者の関係を見たものである。表からは、性別にかかわらず、アルバイト経験がないの方が、正社員内定を取っている割合が高いことがわかる。また表9のアルバイト時間の長短と正社員内定の有無の関係を見てみても、アルバイト時間が短いほど、正社員内定を取っている者の割合が高いことがわかる。表7、8を見る限りでは、高校3年時点でのアルバイト経験は、その後の正社員就業に負の影響を与えているように見える。

そこで前節同様に、計量分析からアルバイトと正社員就業との関係を検証する。ただ高校生のうち、就職を選択する者の割合は少ないため、これらのグループのみを抽出して分析すると、推定結果にバイアスがかかる可能性がある。そこで、まずどのような属性の者

表8 アルバイト経験と正社員内定との関係

アルバイト経験	標本数	正社員内定	
		なし	あり
なし	1201	22.06	77.94
あり	653	32.31	67.69
合計	1854	25.67	74.33
男子×アルバイト経験			
なし	700	18.43	81.57
あり	299	24.41	75.59
合計	999	20.22	79.78
女子×アルバイト経験			
なし	498	27.31	72.69
あり	352	39.20	60.80
合計	850	32.24	67.76

注) 表中の単位は、標本数が人、正社員内定が%

表9 アルバイト経験と正社員内定との関係

アルバイト時間	標本数	正社員内定	
		なし	あり
1-10	213	29.11	70.89
11-20	249	32.53	67.47
21-30	135	34.81	65.19
30+	56	37.50	62.50
合計	653	32.31	67.69
男子×アルバイト時間			
1-10	94	21.28	78.72
11-20	107	20.56	79.44
21-30	74	33.78	66.22
30+	24	25.00	75.00
合計	299	24.41	75.59
女子×アルバイト時間			
1-10	119	35.29	64.71
11-20	140	42.14	57.86
21-30	61	36.07	63.93
30+	32	46.88	53.13
合計	352	39.20	60.80

注) 表中の単位は、標本数が人、正社員内定が%

が就職を選択するのかを推定し、その結果を用いて推定結果のバイアスを補正しながら推定する。つまり、1段階目に就職を選択するか否かの二値変数に対するプロビット・モデルを適用し、2段階目にも正社員内定を獲得できたか否かに対するプロビット・モデルを適用する<sup>(2)</sup>。

前節の説明変数に加えて、本節の推定では下記の説明変数を使用する。

成績ダミー：成績下位ダミーと成績上位ダミーの2つ。基準グループは成績中位である。

高校の中での成績順に関して、回答者自身に尋ねた項目である。成績上位の方が内定を得やすいと考えられる。

一貫して就職指向ダミー：高校1年次から3年次の8月まで、一貫して就職を希望していた場合に1をとるダミー。早い時期から就職を希望している者の方が、準備に多くの時間をかけられるので、正社員内定を得やすいと考えられる。

就職活動スコア：就職活動に関する複数の項目の中から、その項目を実行した場合に1点、しなかった場合に0点をつけ、3つの就職活動タイプ別に加算したスコア。就職活動1スコアは、「求人票を見た」「進路指導室の資料を見た」「会社の説明会や職場の見学会に参加した」「職業適性検査を受けた」の4項目、就職活動2スコアは、「就職試験のための補講を受けたり勉強した」「就職模試を受けた」「就職試験にそなえて面接の練習をした」の3項目、就職活動3スコアは「ジュニアワークフェアに参加した」「就職試験を受けた」の2項目に関して、点数を加算している。これらのスコアが高い方が就職活動に対して十分に準備していたと考えられるので、正社員内定を獲得しやすいと考えられる。

表10は2段階目のプロビット・モデルの結果、つまり正社員内定を獲得できたか否かに



表 10 アルバイト経験と正社員内定との関係  
(サンプルセレクションを考慮したプロビット・モデル)

	男女計	男子	女子
	係数	係数	係数
性別ダミー	-0.257 ***		
四大進学率	-0.595	-1.285 ***	0.158
商業科ダミー	0.285 **	0.387 *	0.241
工業科ダミー	1.141 ***	0.958 ***	1.292 ***
総合学科ダミー	0.133	0.006	0.419 **
その他の学科ダミー	0.347 *	0.106	0.375
成績下位ダミー	-0.276 ***	-0.178 *	-0.334 **
成績上位ダミー	0.019	0.014	-0.032
一貫して就職指向	0.249 ***	0.228 **	0.193
就職活動1	0.010	0.012	0.035
就職活動2	0.036	-0.031	0.133 **
就職活動3	0.563 ***	0.348 ***	0.752 ***
アルバイトの有無	-0.185 ***	-0.087	-0.271 **
定数項	-0.514 ***	-0.537 ***	-0.666 *
RHO	0.614 *	0.898 ***	0.130
標本数	5644	2592	3052
うち選択数	1424	746	678
対数尤度	-3066.00	-1467.44	-1577.89
Prob > chi2	0.000	0.000	0.000

注) \*\*\*, \*\*, \*はそれぞれ 1%、5%、10%水準で有意なことを示す。

関する推定結果を示したものである。まず男女計の結果を見ると、商業科、工業科の各ダミーが正に有意であり、普通科に比べて正社員の内定を得やすいことがわかる。また、一貫して就職指向を持っていた者や就職試験を受けたことがある者の方が、正社員内定を獲得している。他方、成績下位ダミー、そしてアルバイトの有無ダミーは負に有意である。つまりクロス表でも計量分析でも、アルバイト経験は正社員内定に負の影響を示している。ただ、男女でサンプルを分割すると、アルバイト経験の負の効果は女子学生でのみ確認でき、男子学生では符号は負だが有意でなくなっている。

## 5. 結論

本稿では高校生に対するアンケート調査から、アルバイト経験の有無とその後の進路の関係、特に正社員の内定を獲得できたか否かに対する効果について、計量分析を用いて検証した。推定の結果、高校3年4-7月にアルバイトしていた高校生は、その後、正社員の内定を獲得しにくくなっていることがわかった。ただ性別でサンプルを分割して推定すると、女子生徒ではアルバイト経験が正社員内定獲得に有意に負の影響を与えていたが、男子生徒では効果が有意でなくなった。

本稿の結果は、アルバイト経験がその後の職業生活に正の影響を与えるという米国の研究結果とは異なる結果である。ただ、本稿の調査ではアルバイト期間を高校3年次の4-7月のみに限定しており、高校1年次や2年次におけるアルバイト経験については把握できておらず、本稿の結果をもって、アルバイト経験が就職に関して負の影響を与えると結論

づけることには注意を要する。また、高校3年次の4-7月にアルバイトをしているということ自体が、その者に関する何らかの負のシグナルを代理している可能性があり、そのシグナルの原因を除去して推定する必要があるだろう。これらの問題に関しては、今後の研究課題としたい。

#### [注]

- (1) トービット・モデルの詳細に関しては、例えば Amemiya (1985)、縄田 (1997) などを参照。
- (2) サンプルセレクションバイアスを考慮したプロビット・モデル推定に関しては、Van de Ven and Van Pragg (1981) を参照。

#### [参考文献]

- Amemiya, T. (1985), *Advanced Econometrics*, Harvard University Press.
- Stern et al. (1997), "What Difference Does It Make If School and Work are Connected? Evidence on Co-operative Education in the United States," *Economics of Education Review*, Vol. 16, No. 3, pp. 213-229.
- Ruhm, C. J. (1997), "Is High School Employment Consumption or Investment?," *Journal of Labor Economics*, Vol. 15, No. 4, pp. 735-776.
- Van de Ven, W. P. M. M. and B. M. S. Van Pragg (1981), "The Demand for Deductibles in Private Health Insurance: A Probit Model with Sample Selection," *Journal of Econometrics*, Vol. 17, No. 2, pp. 229-252.
- 遠藤惣一・牧正英・西山美瑛子 (1994)、「学生アルバイトに関する実証的研究 (その2)——中京以西アルバイト学生 4000 人の実態・意識調査結果の分析」、『社会学部紀要』(関西学院大学)、第 70 号、pp. 3-70。
- 中島史明 (2000)、「アルバイトの実態とその規定因」、日本労働研究機構調査研究報告書、No. 138、第 7 章。
- 縄田和満 (1997)、「Probit, Logit, Tobit」、牧厚志・宮内環・浪花貞夫・縄田和満編著、『応用計量経済学 II』第 4 章、多賀出版。

# 就職と希望進路の変更パターンの関係について 希望進路変更が及ぼす影響とそれでも進路を変える理由

鶴田 典子

本章では、高校生の職業移行への前段階である進路決定過程を改めて観察して分析を行った。高校生全体では、希望進路の変更はあまり行われておらず平均希望進路変更回数も1回を下回る。上位の希望進路変更パターンは高校1年時から高校3年冬まで一貫して同じ進路を希望しているものであった。希望進路の変更は「高校1年から高校2年の間」である場合が多いが、「高校3年夏から高校3年冬の間」にも1割前後の生徒が変更している。

就職希望の生徒にとって、希望進路の変更は内定の獲得にマイナスに寄与するという結果が得られた。高校3年夏から高校3年冬の間就職から他の進路に変更した生徒には、「いい就職先がない」、「希望する職種の求人が少ない」、「就職試験に失敗した」などの理由をあげる者が多く、その変更先としては「フリーター」が最も多い。なお、自己評価の高い生徒はこの時期に就職から他に進路を変えない傾向が見られた。

## 1. はじめに

### 1.1 分析の視点

1990年代に入り、若年者の雇用問題の1つとして高校生の職業への移行の問題が注目を集めるようになってからしばらくがたつ。この間、多くの研究者がこの問題について調査を行い、行政側も文部科学省と厚生労働省が中心となってさまざまな施策を実行してきた。最近では幸いなことに景気の回復に伴い高校生の内定率も改善に向かっていることもあつてか、このテーマは一段落ついた感があり、若年者雇用問題の焦点は高校生の職業移行からNEETの問題などこれまで手のつけられてこなかった方へと移りつつある。

しかし、若年者の雇用問題はまずは都市部で観察されるということや、高校生の職業移行の問題に関して言えば、調査対象として力点をおかれたのがいわゆる「進路多様校」の生徒だったということもあり、若年層、あるいは高校生の全体像を把握するような調査はあまり行われてきていない。

そこで本章では、高校生の全体像を把握できるように配慮したサンプリングがなされている今回の生徒調査のデータを用い、まずは高校生の職業移行への前段階である進路決定過程を改めて観察し、その上で職業への移行に焦点を絞っていくつかの検証を行うこととしたい。

このような高校生の進路決定過程の分析を改めて試みるのは、高校時代という多感な時期に「迷う」ことが結果として不利になるのだろうか、高校時代というのは高校生活を通じて目標をしぼっていく、そんな時期ではないのだろうか、といった筆者の素朴な疑問が背景にあるためである。

## 1.2 本章の構成

今回は 1.1 で触れたとおり、使用するデータが高校生の全体像を把握するようなサンプリングしたうえで得られたものであることから、まずは高校生の進路決定過程の全体像を確認することから始める。

次に、職業への移行という観点から、高校卒業後就職を希望している生徒に着目し、内定獲得の有無にどのような要因が関係しているのか明らかにすることを試みる。なお、その際には進路決定過程をあらわす1つの指標として、在学中に希望する進路を変えたかどうかという点とその頻度を用いる。

最後に、同じく職業への移行という観点から、就職を希望する高校生の企業への推薦・応募が解禁になる9月より前の時点で就職を希望していた生徒が、調査の行われた年明けの時点でどのような進路を選択・希望しているのかという点を整理する。これは、9月から始まるいわゆる高校による就職あっせんの期間を通じて生徒の状態がどのように変わるのかを整理することで、生徒が高校から職業へと移行しようとしていく過程で何がおきているのか、その一端を明らかにすることができると思われるためである。

## 2. 希望進路変更パターンから見た高校生の姿

### 2.1 使用データ・指標について

進路決定過程を観察・把握するために、アンケートで得られた回答を希望進路変更パターンという形で整理する。

使用するのは「あなたは次の時期（高校1年の頃、高校2年の頃、高校3年の4～5月頃（以下「高校3年の春頃）」、高校3年の7～8月頃（以下「高校3年の夏頃」）に、高校卒業後どのようにしたいと思っていましたか（生徒調査問2）」と「今の時点（以下「高校3年の冬頃」）で、高校卒業後にどのような進路にすすむ予定ですか（生徒調査問3）」という2つの設問への回答である。これで在学中の5時点における希望進路を把握することができる<sup>①</sup>。この5時点における回答内容のつながり、すなわち回答パターンを1セットとして扱う。この回答パターンを本章では「希望進路変更パターン」と呼ぶこととする。この希望進路変更パターンは理論上  $8 \times 8 \times 8 \times 8 \times 13 = 53,248$  パターンありえる<sup>②</sup>。

さらに、各パターンについて、希望進路がどの程度変化したか、各時点の間で希望進路に変更があれば1、なければ0とカウントし、それを足しあげることで進路変更の頻度を算出する。この値を「希望進路変更回数」とする。今回は5時点あるので、希望進路変更回数は最小値が0回、最大値が4回となる<sup>③</sup>。また、変更の回数ではなく、変更の有無、つまり変更回数が0回だったか1回以上だったかを示す値を「希望進路変更有無」と呼ぶこととする。

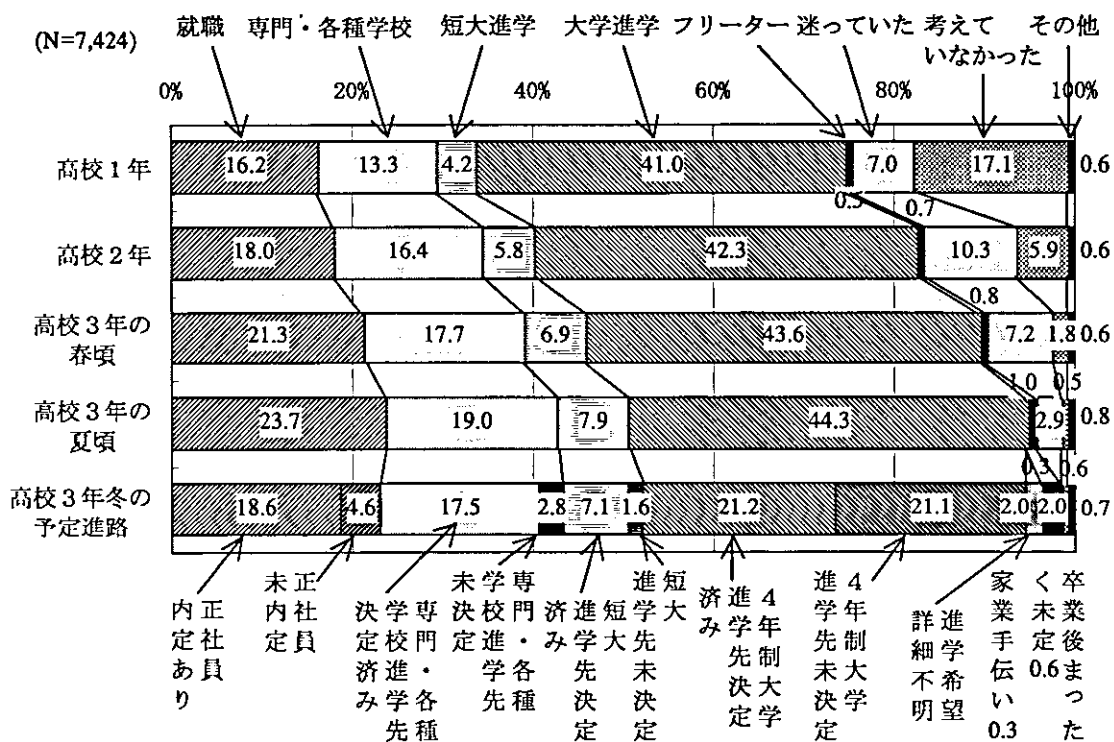
なお、本章では「性別不明」、「希望進路または最終進路の中で1時点以上が不明」、「学科不明」のものは分析の都合上除外したため、全7,563サンプル中7,424サンプルを使用

している。

## 2.2 サンプルの概要

図1は各時点における希望進路別生徒数の構成比をグラフ化したものである。この図を見ると、高校1年の時点では約4分の1を占めていた「迷っていた」、「考えていなかった」生徒の比率が時の経過とともに低下していき、「就職」や「専門・各種学校」、「短大」、「大学」に振り分けられていっていることが分かる。なお、この表でわかるのは、高校生の希望進路が全体としては徐々に明確になっていく様子である。

図1 各時点における希望進路別生徒数（構成比）



次に、はじめとおわり、すなわち高校1年の時点と高校3年冬の間で希望がどのように変化したのか、クロス表で確認する。

表 1 高校1年の時点の希望進路別高校3年冬の時点での希望進路

		高校卒業後の予定進路（高校3年冬の時点）																				合計
		就職希望			進学希望										その他					合計		
		内定あり	未内定	計	専門・各種学校			短大		四年制大学			詳細不明	計	フリーター	家業手伝い	その他	卒業後まったく未定	計			
					進学	未決定	計	進学	未決定	計	進学先	未決定									計	
決定済	未決定	計	決定済	未決定	計	決定済	未決定	計	決定済	未決定	計	決定済	未決定	計	決定済	未決定	計					
当時の希望進路（高校1年の頃）	就職	642	139	781	169	14	183	56	4	60	74	29	103	13	359	34	7	11	9	61	1201	
		53.5	11.6	65.0	14.1	1.2	15.2	4.7	0.3	5.0	6.2	2.4	8.6	1.1	29.9	2.8	0.6	0.9	0.7	5.1	100.	
	専門・各種学校	206	70	276	362	56	418	73	13	86	103	41	144	12	660	38	3	8	6	55	991	
		20.8	7.1	27.9	36.5	5.7	42.2	7.4	1.3	8.7	10.4	4.1	14.5	1.2	66.6	3.8	0.3	0.8	0.6	5.5	100.	
	短大進学	29	22	51	71	12	83	93	26	119	30	18	48	9	259	3	-	1	1	5	315	
		9.2	7.0	16.2	22.5	3.8	26.3	29.5	8.3	37.8	9.5	5.7	15.2	2.9	82.2	1.0	-	0.3	0.3	1.6	100.	
	大学進学	114	19	133	287	71	358	153	46	199	1015	1226	2241	66	2864	17	3	19	8	47	3044	
		3.7	0.6	4.4	9.4	2.3	11.8	5.0	1.5	6.5	33.3	40.3	73.6	2.2	94.1	0.6	0.1	0.6	0.3	1.5	100.	
	フリーター	3	6	9	7	1	8	3	-	3	5	1	6	1	18	10	1	0	-	11	38	
		7.9	15.8	23.7	18.4	2.6	21.1	7.9	-	7.9	13.2	2.6	15.8	2.6	47.4	26.3	2.6	0.0	-	28.9	100.	
迷っていた	103	23	126	148	18	166	54	6	60	89	55	144	11	381	8	1	0	2	11	518		
	19.9	4.4	24.3	28.6	3.5	32.0	10.4	1.2	11.6	17.2	10.6	27.8	2.1	73.6	1.5	0.2	0.0	0.4	2.1	100.		
考えていなかった	267	58	325	247	33	280	93	27	120	252	191	443	35	878	35	8	8	18	69	1272		
	21.0	4.6	25.6	19.4	2.6	22.0	7.3	2.1	9.4	19.8	15.0	34.8	2.8	69.0	2.8	0.6	0.6	1.4	5.4	100.		
その他	15	3	18	5	1	6	2	-	2	5	5	10	2	20	2	1	3	1	7	45		
	33.3	6.7	40.0	11.1	2.2	13.3	4.4	-	4.4	11.1	11.1	22.2	4.4	44.4	4.4	2.2	6.7	2.2	15.6	100.		
合計	137	340	171	129	206	150	527	122	649	1573	1566	3139	149	5439	147	24	50	45	266	7424		
	18.6	4.6	23.2	17.5	2.8	20.2	7.1	1.6	8.7	21.2	21.1	42.3	2.0	73.3	2.0	0.3	0.7	0.6	3.6	100.		

表1は、高校3年冬の時点での希望進路を高校1年の時点の希望進路別にみた表であり、太枠で囲ってあるところが高校1年でも高校3年冬でも同じ進路を希望していた生徒の人数と比率である。これを見ると、就職や四年制大学は高校1年時と高校3年冬の時点で同じ進路を希望している生徒の比率が高いが（それぞれ65.0%、73.6%）、専門・各種学校や短大についてはその比率が前者に比べて相対的に低く（それぞれ42.2%、37.8%）、2時点間を見ただけでも他の進路へと希望を変わっている生徒の多い様子がうかがえる。

### 2.3 希望進路変更回数（高校生全体）

希望進路の動きの概要をみたところで、今度は希望進路変更回数の分布という視点からデータを観察する。

表2は性、学科、県、卒業後の予定進路別に希望進路の変更回数の平均とその分布を一覧にしたものである。まず、全サンプルの平均変更回数が0.90回と1を下回っていることから、高校1年時から高校3年冬までの間、希望進路が変わらない生徒の多い様子がうかがえる。実際、変更回数別の分布を見ても「0回」の生徒が43.6%と半数近くを占めている。

属性別に見た場合は、女性、商業系学科などの平均値が高く、男性、普通科は低い。普通科の平均値が低いのは、進学校や私立大学の附属高校など、入学当初から四年制大学進学を念頭においている生徒が多いためであろう。

また、職業への移行という観点からすれば、正社員希望者では内定のある生徒の方が未内定の生徒よりも平均変更回数が低い。また「フリーター」や「卒業後まったく未定」の生徒の平均値が高い点も特徴的である。

表 2 性別、学科別、県別、高校卒業後の予定進路別希望進路変更回数

		希望進路変更回数									希望進路変更回数						
		平均	0回	1回	2回	3回	4回	合計			平均	0回	1回	2回	3回	4回	合計
合計		0.90	3239	2175	1570	393	47	7424	高校卒業後の予定進路	正社員内定あり	0.93	559	447	300	63	10	1379
		回	43.6	29.3	21.1	5.3	0.6	100.			回	40.5	32.4	21.8	4.6	0.7	100.
性別	男	0.81	1736	1022	675	158	25	3616	正社員未内定	1.08	115	112	87	22	4	340	
		回	48.0	28.3	18.7	4.4	0.7	100.			回	33.8	32.9	25.6	6.5	1.2	100.
	女	0.98	1503	1153	895	235	22	3808	専門・各種学校：進学先決定済	1.24	284	527	385	96	4	1296	
		回	39.5	30.3	23.5	6.2	0.6	100.			回	21.9	40.7	29.7	7.4	0.3	100.
Pearson の $\chi^2$ 乗		65.836	漸近有意確率 (両側)					0.000	専門・各種学校：進学先未決定	1.20	41	100	50	13	2	206	
学科	普通科	0.84	2426	1489	1004	259	30	5208			回	19.9	48.5	24.3	6.3	1.0	100.
	商業系学科	1.16	193	192	186	46	5	622	短大：進学先決定済み	1.41	65	237	173	49	3	527	
			回	31.0	30.9	29.9	7.4	0.8		100.		回	12.3	45.0	32.8	9.3	0.6
	工業系学科	0.99	294	244	189	43	4	774	短大：進学先未決定	1.36	21	51	36	13	1	122	
			回	38.0	31.5	24.4	5.6	0.5		100.		回	17.2	41.8	29.5	10.7	0.8
	総合学科	1.06	202	202	151	32	7	594	4年制大学進学先決定済み	0.66	918	322	280	49	4	1573	
			回	34.0	34.0	25.4	5.4	1.2		100.		回	58.4	20.5	17.8	3.1	0.3
	その他の学科	0.76	124	48	40	13	1	226	4年制大学進学先未決定	0.39	1160	244	130	28	4	1566	
		回	54.9	21.2	17.7	5.8	0.4	100.			回	74.1	15.6	8.3	1.8	0.3	100.
Pearson の $\chi^2$ 乗		121.588	漸近有意確率 (両側)						フリーター	1.88	7	44	63	26	7	147	
県	秋田県	0.90	822	562	390	104	13	1891	家業手伝い	1.63	5	7	6	4	2	24	
			回	43.5	29.7	20.6	5.5	0.7		100.		回	20.8	29.2	25.0	16.7	8.3
	宮城県	0.91	762	531	377	93	11	1774	その他	1.71	3	21	13	11	1	49	
			回	43.0	29.9	21.3	5.2	0.6		100.		回	6.1	42.9	26.5	22.4	2.0
	石川県	0.93	1148	785	614	148	19	2714	卒業後まったく未定	2.00	4	11	16	9	5	45	
			回	42.3	28.9	22.6	5.5	0.7		100.		回	8.9	24.4	35.6	20.0	11.1
	神奈川県	0.80	507	297	189	48	4	1045	進学希望：詳細不明	0.96	57	51	31	10		149	
			回	48.5	28.4	18.1	4.6	0.4		100.		回	38.3	34.2	20.8	6.7	
Pearson の $\chi^2$ 乗		18.041	漸近有意確率 (両側)						正社員内定あり+専門学校進学先決定済み	1.00		1				1	
										回		100.				100.	
Pearson の $\chi^2$ 乗		1689.710	漸近有意確率(両側)														

## 2.4 希望進路変更パターン (高校生全体)

次に、より細かく、希望進路変更パターン別に生徒の分布を見てみる。表3は性別学科別に希望進路変更パターンを一覧にしたものである。今回のデータでは、全部で1,254の希望進路変更パターンが観察されたが、一覧表ではそのうち上位49パターンのみを掲載した。なお、この上位49パターンに全サンプルの63.2%が含まれている。

一番多い希望進路変更パターンは「高校1年から高校3年冬まで大学進学希望で進学先

未決定」(15.6%)であり、2番目に多い「高校1年から高校3年冬まで大学進学希望で進学先決定済み」(12.4%)とあわせて全体の4分の1以上を占めている。さらに、上位5パターンで40.9%を占めているが、これらはみな希望進路が高校1年から一貫しているものである。高校生全体というくくりで見れば、半数近くの生徒が高校入学時から一貫して同じ進路を希望しているということが分かる。

属性別に見ると、男性の方が女性に比べて高校1年の時点で「何も考えてなかった」パターンの生徒が上位にくる(男性の6、7、8位が女性ではそれぞれ19、16、14位)。また学科別では商業系学科や工業系学科で一貫して大学を希望している生徒は、進学先がすでに決定しているケースの方が未決定に比べて多い。これは職業系学科から進学する場合は一般入試ではなく学校推薦が多いためであろう。なお、職業系学科および総合学科で一番多いのは高校1年から高校3年冬まで一貫して就職を希望し内定も得られているパターンである。

表3 性別学科別希望進路の変更パターン一覧

	男女計		男性		女性		男女計		男女計		男女計		男女計		男女計		男女計					
	全学科		全学科		全学科		普通科		商業系学科		工業系学科		総合学科		その他の学科計							
サンプル数	7424		3616		3808		5208		622		774		594		226							
平均希望進路変更回数	0.90		0.81		0.98		0.84		1.16		0.99		1.06		0.76							
高校1年	高校2年	高校3年春	高校3年夏	高校3年冬	希望進路変更回数	人数	%	累積%	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位				
大学	大学	大学	大学	大学未決	0	1160	15.6	15.6	639	1	521	1	1071	1	3	26	3	33	21	3	62	1
大学	大学	大学	大学	大学決定	0	918	12.4	28.0	513	2	405	2	789	2	33	3	35	2	43	2	18	3
就職	就職	就職	就職	就職内定あり	0	559	7.5	35.5	367	3	192	3	178	4	77	1	204	1	75	1	25	2
専門各種	専門各種	専門各種	専門各種	専門各種決定	0	284	3.8	39.3	102	4	182	4	185	3	44	2	30	3	21	3	4	6
就職	就職	就職	就職	就職内定なし	0	115	1.5	40.9	60	5	55	6	51	7	23	4	13	6	19	5	9	4
考えてなかった	就職	就職	就職	就職内定あり	1	73	1.0	41.9	51	6	22	19	32	17	7	10	27	4	5	14	2	10
考えてなかった	大学	大学	大学	大学未決	1	71	1.0	42.8	46	7	25	16	68	5	1	77			2	43		
考えてなかった	大学	大学	大学	大学決定	1	69	0.9	43.8	43	8	26	14	59	6	2	38	5	21	3	28		
短大	短大	短大	短大	短大決定	0	65	0.9	44.6	4	89	61	5	46	8	9	7	2	52	7	8	1	18
大学	大学	専門各種	専門各種	専門各種決定	1	58	0.8	45.4	31	9	27	13	46	8	5	15	1	80	6	9		
専門各種	専門各種	就職	就職	就職内定あり	1	58	0.8	46.2	23	18	35	8	31	18	5	15	7	12	11	6	4	6



						男女計		男性		女性		男女計											
						全学科		全学科		全学科		普通科	商業系 学科	工業系 学科	総合学科	その他の 学科計							
サンプル数						7424		3616		3808		5208	622	774	594	226							
平均希望進路変更回数						0.90		0.81		0.98		0.84	1.16	0.99	1.06	0.76							
高校 1年	高校 2年	高校 3年 春	高校 3年 夏	高校 3年 冬	希望 進路 変更 回数	人数	%	累積 %	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位					
迷っていた	専門 各種	専門 各種	専門 各種	専門 各種	専門 各種 決定 あり	1	57	0.8	47.0	20	22	37	7	43	10	1	77	5	21	6	9	2	10
専門 各種	就職	就職	就職	就職	就職 内定 あり	1	56	0.8	47.7	26	15	30	11	28	21	7	10	13	6	4	24	4	6
大学	専門 各種	専門 各種	専門 各種	専門 各種	専門 各種 決定	1	54	0.7	48.5	23	18	31	10	42	11	1	77	6	15	5	14	-	-
考え な か た	専門 各種	専門 各種	専門 各種	専門 各種	専門 各種 決定	1	49	0.7	49.1	19	23	30	11	33	16	8	9	3	33	5	14	-	-
大学	大学	大学	大学	大学	進学 詳細 不明	0	46	0.6	49.7	30	11	16	33	40	12	-	-	2	52	3	28	1	18
迷っていた	大学	大学	大学	大学	大学 決定	1	46	0.6	50.4	25	16	21	23	37	14	4	21	2	52	3	28	-	-
大学	大学	大学	大学	大学	専門 各種 決定	1	41	0.6	50.9	19	23	22	19	37	14	2	38	1	80	-	-	1	18
迷っていた	就職	就職	就職	就職	就職 内定 あり	1	41	0.6	51.5	18	26	23	17	11	53	12	5	12	8	5	14	1	18
専門 各種	専門 各種	専門 各種	専門 各種	専門 各種	専門 各種 未 定	0	41	0.6	52.0	7	58	34	9	31	18	3	26	1	80	4	24	2	10
就職	就職	就職	専門 各種	専門 各種	専門 各種 決定	1	40	0.5	52.5	23	18	17	30	12	50	10	6	12	8	6	9	-	-
考え な か た	考え な か た	考え な か た	大学	大学	大学 決定	1	39	0.5	53.1	31	9	8	64	26	25	5	15	5	21	2	43	1	18
考え な か た	考え な か た	考え な か た	大学	大学	大学 未 決	1	39	0.5	53.6	27	14	12	40	39	13	-	-	-	-	-	-	-	-
考え な か た	考え な か た	迷っていた	迷っていた	迷っていた	迷っていた	2	38	0.5	54.1	28	12	10	50	27	22	1	77	4	31	6	9	-	-
考え な か た	考え な か た	考え な か た	就職	就職	就職 内 定 あり	1	38	0.5	54.6	28	12	10	50	13	43	5	15	14	5	1	82	5	5
考え な か た	迷っていた	迷っていた	迷っていた	迷っていた	迷っていた	2	38	0.5	55.1	19	23	19	26	23	29	6	13	5	21	2	43	2	10
大学	大学	大学	専門 各種	専門 各種	専門 各種 決定	1	37	0.5	55.6	14	30	23	17	31	18	3	26	1	80	2	43	-	-
就職 各種	専門 各種	専門 各種	専門 各種	専門 各種	専門 各種 決定	1	35	0.5	56.1	24	17	11	44	16	36	9	7	5	21	5	14	-	-
考え な か た	迷っていた	就職	就職	就職	就職 内 定 あり	2	32	0.4	56.5	23	18	9	55	10	58	5	15	9	10	5	14	3	9

	男女計		男性	女性	男女計																		
	全学科		全学科	全学科	普通科	商業系 学科	工業系 学科	総合学科	その他の 学科計														
サンプル数	7424		3616	3808	5208	622	774	594	226														
平均希望進路変更回数	0.90		0.81	0.98	0.84	1.16	0.99	1.06	0.76														
高校1年	高校2年	高校3年春	高校3年夏	高校3年冬	希望進路変更回数	人数	%	累積%	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位	人数	順位					
専門各種	専門各種	専門各種	就職	就職内定あり	1	32	0.4	57.0	11	38	21	23	12	50	6	13	8	11	5	14	1	18	
大学	短大	短大	短大	短大	1	31	0.4	57.4	5	69	26	14	22	31	1	77			8	7			
専門各種	大学	大学	大学	大学	1	30	0.4	57.8	13	32	17	30	27	22	1	77	2	52					
迷っていた	大学	大学	大学	大学	1	29	0.4	58.2	9	49	20	25	27	22					2	43			
迷っていた	大学	大学	大学	短大	1	28	0.4	58.6	6	64	22	19	25	26			2	52	1	82			
迷っていた	迷っていた	専門各種	専門各種	専門各種	1	27	0.4	58.9	16	27	11	44	20	32	1	77	3	33	2	43	1	18	
迷っていた	迷っていた	就職	就職	就職内定あり	1	27	0.4	59.3	15	28	12	40	13	43	2	38	5	21	6	9	1	18	
大学	大学	短大	短大	短大	1	27	0.4	59.6	5	69	22	19	24	28	1	77			2	43			
大学	就職	就職	就職	就職内定あり	1	26	0.4	60.0	14	30	12	40	15	41	2	38	7	12	2	43			
大学	大学	大学	大学	専門各種	1	25	0.3	60.3	11	38	14	37	23	29								2	10
専門各種	大学	大学	大学	大学	1	25	0.3	60.7	7	58	18	29	25	26									
就職	就職	専門各種	専門各種	専門各種	1	23	0.3	61.0	15	28	8	64	10	58	4	21	7	12	2	43			
大学	大学	大学	短大	短大	1	23	0.3	61.3	4	89	19	26	20	32			2	52	1	82			
迷っていた	迷っていた	大学	大学	大学	1	22	0.3	61.6	10	44	12	40	16	36	3	26			3	28			
短大	短大	短大	短大	短大	0	21	0.3	61.9	4	89	17	30	16	36					5	14			
考えなかった	迷っていた	大学	大学	大学	2	20	0.3	62.1	12	34	8	64	19	34					1	82			
専門各種	専門各種	短大	短大	短大	1	20	0.3	62.4	1	24	19	26	13	43	3	26	1	80	3	28			
就職	就職	就職	就職	フリーター	1	19	0.3	62.7	8	52	11	44	11	53	2	38	1	80	5	14			
大学	専門各種	専門各種	専門各種	専門各種	1	19	0.3	62.9	4	89	15	36	17	35					2	43			
短大	専門各種	専門各種	専門各種	専門各種	1	18	0.2	63.2	2	15	16	33	16	36			1	80	1	82			

※「男女計」の「全学科」について上位49パターン（全サンプルの63.2%）を抽出

## 2.5 希望進路変更時期（高校生全体）

希望進路変更という観点から高校生の全体像を把握する試みの最後として、どのタイミングで希望進路を変更しているのかという点を整理する。

図2および図3は、各時点間ごとに希望進路を変更した生徒の比率を性別、学科別にグラフ化したものである。これを見ると、全体をはじめ、その他の学科計を除くすべての属性においてグラフが右下がり、すなわち早い段階では希望する進路を変える生徒が多いものの、時間が経つにつれて希望進路を変えなくなる傾向のあることがわかる。ただし、それでも高校3年夏から高校3年冬の間には10%前後の生徒が希望進路を変えている。

また属性別に見た場合、商業系学科の生徒は高校1年から高校2年の間にほぼ4割、高校3年春から高校3年夏の間にも約3割の生徒が希望を変えているが、これは他の学科に比べてかなり高い水準にあるといえる。

図2 各時点における希望進路変更生徒の比率（男女別）

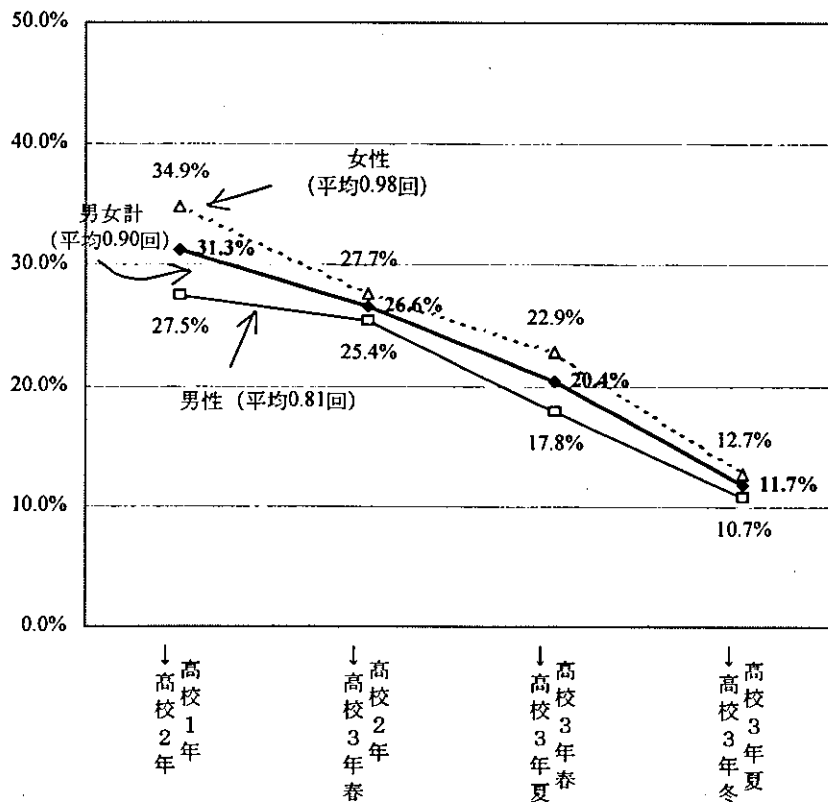
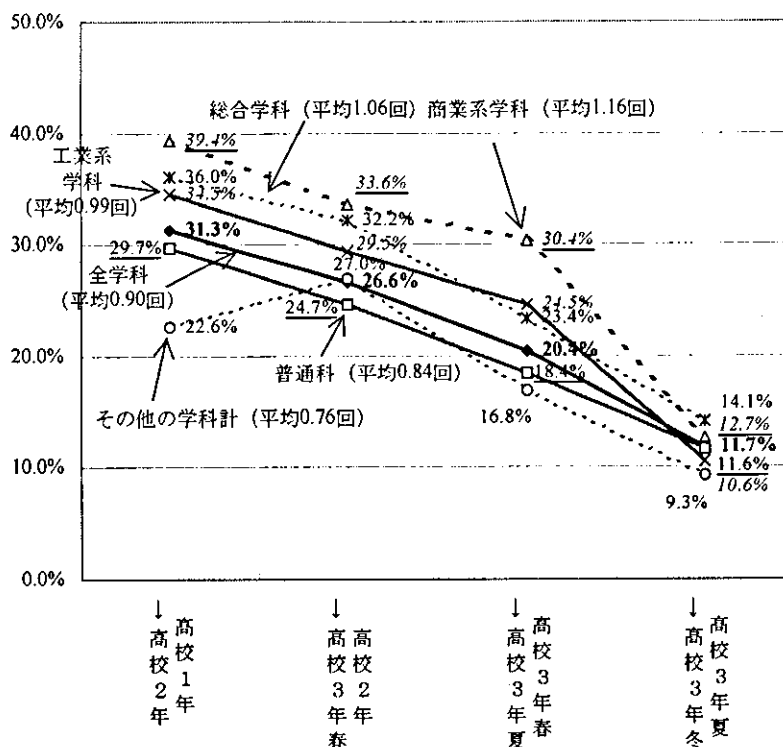


図 3 各時点における希望進路変更生徒の比率（学科別）



### 3. 最終的に就職を希望する生徒について

希望進路の変更状況という観点から高校生全体の全体像を確認したところで、今度は就職を希望している生徒について見ていくことにする。

まずは、最終的（高校3年冬の時点）で正社員の就職を希望（予定）している生徒に着目し、彼・彼女らの内定の有無がどのような要因によるものなのかについて、特に本章の底流をなす問題意識から希望がコロコロと変わる生徒はそうでない生徒に比べて今の就職あっせんの枠組みの中では不利なのかを見るために、希望進路変更回数および希望進路変更有無を考慮にいれながら探っていくこととする。なお、高校3年冬の時点で正社員の就職を希望（予定）している生徒は全7,424サンプル中1,719サンプルである。

#### 3.1 サンプルの概要

##### 3.1.1 クロス表による分析

まずは属性および希望進路変更回数、希望進路変更有無と内定の有無の関係を表4から見る。

表4からわかることは、男性の方が女性よりも内定を得ている生徒の比率が高いこと、学科別では内定なしに占める普通科の比率が高く、工業系学科の比率が著しく低いこと、県別では宮城県と石川県の間で構成比が大きく異なること、希望進路を変更した生徒は変更しなかった生徒に比べて内定なしに占める比率が高いこと、などである。